PORT ESSAY

ポ　ー　ト　＊　エ　ッ　セ　イ

いつも帰る場所

●エッセイスト　**桐島ノエル**

PROFILE
きりしま・のえる

1965年、神奈川県横浜市生まれ。米ミルズカレッジ中退。92年、テレビ番組「ＯＬ！エルくらぶ」のメーン司会者としてデビュー。
その後、エッセイ、トークショー、翻訳、執筆活動を中心に幅広く活動する。97年に結婚。カナダ・バンクーバーに移住し、長女を出産。
2005年に活動の拠点を日本に戻し、アロマテラピスト、ヨガのインストラクターとしても活躍している。
主な著書に『ママとこどもの毎日ヨガ』『こんなに夜があたたかいなんて』『魔法のお風呂』『もっと素敵なキスのために』などがある。

私はマルセイユから神戸に向かう客船の上で産まれました。そう聞くと大抵の人は「まあ、素敵ねえ」とロマンティックなイメージを持たれるようですが、現実はどちらかといえばドラマティックなものでした。

当時、日本の出版社に勤めていた私の母は子供を産んだら仕事を辞めなければならないという会社の規定をなんとかくぐり抜けられないかと色々画策しました。そして、海外旅行に行くフリをして旅先で産んでしまえば、誰にも気づかれないですむのではないか、というとんでもないプランを思いついたのです。

会社の許可もとり、ゆるめの服で日々膨らむお腹を隠し、何食わぬ顔で出社し続けていた母は、その間も着々と壮大なバケーション計画を練りあげていきました。ロシア経由でヨーロッパに入り、電車でマルセイユまで行き、そこで日本行きの客船に乗りこみ、ドバイ、エジプト、インドなどをまわり、香港を出て日本に向かう海の上で出産。これならば行きたかった国々を全部見て回ることが出来る上、船だったら船医さんもいることだし出産費用もタダで済む、と。心配しなければならないのはそんなことじゃないだろう、と言いたくなりますが、どこまでもポジティブな発想はなんとも母らしいところです。

しかし、完璧（？）に進んでいたかのように思えた母のプランは出発間際で崩れそうになります。「急な仕事が入ったので旅行を延期してほしい」と突然上司に言い渡されたのです。これ以上妊娠を隠し続けるのは難しいし、下手をすれば私が産まれてしまう。悩んだ母は結局会社を辞めることにし、それでも予定通り私の出産旅行に出かけることにしました。

予想以上にハードだったヨーロッパへの道程を経て、なんとかマルセイユに到着した母は、まだ妊娠６ヶ月だと大嘘をついて船医さんを安心させ、無事船に乗り込むことができました。そして、あとはギリギリまで目一杯旅を楽しもう、と船が港に着くたびに真っ先に町へと繰り出し、妊婦らしからぬ行動をとり続けたのです。実際、ピラミッドの前で大きなお腹をした母がラクダの背に乗り、満面の笑みを浮かべている写真があります。それを

フランス、マルセイユ港の眺望。

見た乗客が船医さんに密告し、何度も船に連れ戻されそうになったといいます。そりゃあ、そうでしょう。

それでもなんとか逃げ切った母は、旅をフルにエンジョイし、あとは日本に着くのを待つだけというところまでこぎ着けます。ところが、今度は私が予定日を過ぎても産まれてくれない。とうとう神戸到着前夜となり、焦った母は何度も階段を上がったり下がったり、飛び跳ねてみたりしたそうです。本当にとんでもない妊婦です。

そして、いよいよ陣痛が始まりました。おりしもそれはクリスマスイブ。船中がお祝いモード一色で、ホッとした船医さんもお酒を飲んでご機嫌になっていたそうです。これは使いものになりそうもない、と覚悟を決めた母は一人で陣痛を乗り切り、産まれる直前に看護婦と船医さんを呼び、無事私を出産しました。それはクリスマスの朝。神戸に到着するほんの数時間前のことでした。

子供の頃から何度も聞かされている話ですが、何度聞いても母の無謀さに呆れてしまいます。自分が子供を持った今ではなおさらです。

まあ、しかしながらかなりユニークな誕生物語なのは確かで、きっとおばあちゃんになっても「またその話か」と言われながら、語り続けることになるのでしょう。

そんな、海とは切っても切れない深い関係を持つ私。「船に乗るたびに生まれ故郷に戻ったような気がする」とでも言えば、とても良い話になるのですが、実は船酔いしやすい体質です。何度か船旅はしていますが、陸が見える間は楽しいものの、まわりに海しかなくなるとちょっと不安になります。シーフードもあまり好きではないし、どちらかといえば海よりも森が好き。なんだ、全然話にならないじゃないか、とお思いでしょうが、私が大好きなのが港町です。

横浜港の大桟橋ふ頭。写真提供／JTBフォト（左ページ下も）

私は横浜の町で育ちました。山下公園のすぐ側のマンションで、廊下からは大桟橋が見え、時折出入りする豪華客船を眺めて空想しながら汽笛の音を聞いていました。当時の横浜はインターナショナルで、どこかミステリアスな雰囲気が残る町でした。中華街に買い物に行けば、人民服姿で煙管をくゆらすおばあちゃんの足下に食用ガエルが飛び跳ねていたりしました。裏通りにはポパイそっくりのセーラー服を着た外国人の船員さんたちがたむろするアヤシい店もありました。子供心にドキドキする、不思議議の国のような町だったのです。

30代はカナダのヴァンクーヴァーで過ごしました。どこか横浜を思い出させる、森と海に囲まれたその美しい町が私は一目で好きになりました。

変化し続けているようで、ずっと変わらない何かがある。新しいものを常に受け入れて来た町ならではの柔軟性と許容範囲の広さを持つ港町。

私がうまれてはじめて目にした陸地、港町こそが、実は私にとっては本当のふるさとなのかもしれません。